

齋藤茂樹の 北関東巡り



令和5年(2023) 1月23日

8

今回は、松尾芭蕉の最初の歌枕の地、栃木県の『室の八嶋』と、『奥の細道むすびの地』である岐阜県大垣市を訪ねたときの話です。

奥の細道むすびの地

愛知県に住んでいたとき、大垣に頻繁に遊びに行きました。大垣城は戦災で焼ける前は国宝だった城で、石田三成が関ヶ原に陣を張る前に滞在していた城です。

また、芭蕉の『奥の細道むすびの地』でもあり、記念館の資料と映像は素晴らしかったです。NEXCO中日本主催のお城めぐりスタンプラリーの景品受取場所もこの記念館でしたので毎年のように行きました。



歌枕『室の八嶋』

元禄2年(1689)3月29日、芭蕉と弟子の曾良は、『奥の細道』の旅における最初の歌枕の地、室の八嶋を訪れました。歌枕※『室の八嶋』は、下野国（現栃木県）にあるとされ、平安時代以来、煙を題材にした歌が詠まれたといえます。



※歌枕とは、古くは和歌において使われた言葉や詠まれた題材、またはそれらを集めて記した書籍のことを意味したが、現在はもっぱらそれらの中の、和歌の題材とされた日本の名所旧跡のことをさしている。

芭蕉が訪れた元禄期には、都賀郡惣社村の室八嶋大明神〔現在の栃木市惣社町の大神神社〕の説として、神社の境内が歌枕『室の八嶋』の地とされ、木花咲耶姫が貞操の証として、燃えさかる無戸室で子を出産したという室

八嶋明神の縁起が残され、境内の八つの小島と池が、古歌に詠まれた歌枕『室の八嶋』と説かれていました。

芭蕉はここで、つぎの句を詠みました。

いとゆう けぶり
糸遊に結びつきたる煙かな

糸遊とはかげろうのこと、けぶりとは川霧のことです。ただしこの句は『奥の細道』には収められていません。

大神神社の境内には、橋で結ばれている八つの小島があります。今では、八つの島は香取神社、二荒山神社、熊野神社、浅間神社・雷電神社、鹿島神社、天満宮、筑波神社と名付けられています。浅間神社は、富士山の神である木花咲耶姫を祭っており、安産の神様といわれています。

黒羽芭蕉の館

栃木県大田原市の黒羽芭蕉の館は、芭蕉に関わる資料と、黒羽藩主大関家の資料を常時展示しています。館の庭には、芭蕉が馬に跨り弟子の曾良を従えているブロンズ像があり、当時の芭蕉の旅の姿がしのべられます。



黒羽藩の藩庁だった黒羽城の三の丸跡に建つのが、黒羽芭蕉の館です。黒羽城下には、松尾芭蕉が『奥の細道』の途中に14日間滞在しました。芭蕉が最も長く滞在したとのが黒羽といわれています。他の地での長逗留は、尾花沢10日間、金沢9日間、山中温泉8日間です。

元禄2年(1689)3月27日、江戸深川の芭蕉庵を旅立った芭蕉と曾良は、千住で最初の句（矢立の初め）を詠んだ後、日光街道で一路日光へ向かいます。黒羽に入ったのは4月3日で、黒羽藩城代家老・浄法寺高勝じょうぼうじたかかつ（俳号・桃雪、あるいは雪桃）を訪ねています。



ここからみちのく「白河の関」

奥州三古関のひとつ「白河関」は福島県にあります。奈良から平安時代頃の関は、人や物資の往来を取りしまっていました。やがて律令制の衰退とともにその機能を失ってからは、都の文化



人たちの憧れの地となり、和歌の名所として知られるようになりました。ここを訪れた歌人・俳人は、松尾芭蕉の他にも能因や西行などがいます。

また、関跡には、源義家や義経にまつわる伝説が残され、樹齢約800年の従二位の杉など数々の巨木もあり、歴史の深さを感じさせます。

芭蕉は、元禄2年(1689)5月下旬(今の暦で6月上旬)に白河の地にたどり着き、「白河の関にかかりて旅ごころ定まりぬ」と、みちのく路の第一歩を踏み出したことに感動を込めて書き残しています。



白河小峰城跡

こみね
小峰城は、東北本線白河駅の北側に位置する小峰ヶ岡と呼ばれる標高370mほどの丘陵に築城した平山城です。ひらやまじろ
史跡として指定されているのは本丸および二之丸の一部ですが、当時の城郭の範囲は約540,000平方メートルの規模と推定されています。

城郭の配置は、丘陵の頂部に本丸を設け、本丸より東側、南側にむけて二之丸、三之丸を設けています。曲輪の周囲には石垣や土塁、大小の堀を巡らし、全体としてやや五角形をした城郭です。現在は、本丸周辺から丘陵部北側の石垣や、堀の一部が残存しているだけで、これまで実施されてきた発掘調査により、各門跡の場所や、城内の建造物の一部などが確認されています。



小峰城(復元)

管理人からひとこと

芭蕉の話題で思い出すのは、山形市にある「山寺」の芭蕉と曾良の像です。山寺は通称で、正式には宝珠山立石寺といい、山形県東部に位置しています。険しい岩山に多くの塔堂が立っています。芭蕉は元禄2年(1689)ここを訪れています。『奥の細道』に「慈覚大師が開いた立石寺という山寺は、清らかでとても静かな土地である。一度は見ておいた方がよいと勧められ、尾花沢から引き返した」と綴られているといえます。

山寺へ登る入口付近に芭蕉と曾良の一对の像が置かれています。芭蕉の像は、管理人の家内の祖父にあたる鈴木傳六でんろくさんが、昭和47年(1972)に、曾良の像は傳六さんのご長男鈴木伝四郎さんが平成元年(1989)にそれぞれ寄贈したものです。芭蕉の右にある石碑には有名なつぎの句が刻まれています。



しずか
閑さや岩にしみ入る蟬の声

傳六さんは株式会社でん六の創業者で、山形市内の霞城公園かじょうにある最上義光公もがみよしあきの騎馬像はじめ多くの銅像を寄贈しています。

【バックナンバー】

- 齋藤茂樹の北関東巡り 1
- 齋藤茂樹の北関東巡り 2
- 齋藤茂樹の北関東巡り 3
- 齋藤茂樹の北関東巡り 4
- 齋藤茂樹の北関東巡り 5

- 齋藤茂樹の北関東巡り 6
- 齋藤茂樹の北関東巡り 7

[Back](#)

「齋藤茂樹の北関東巡り」TOPへ戻る

[Home](#)

「ホームページ」表紙へ戻る